

伊吹山花だより

梅雨の晴れ間をみつけて、伊吹山へ

世の中はいろいろと慌ただしく、つらいことも見聞きしますが、伊吹山はいつも受け入れてくれます。時間を見つけて、ゆっくりとしたときをお過ごしください。登山って、一生懸命登って下るだけでももったいないです。

第60号 (令和4年6月)

上野区：ユウスゲと貴重植物を守り育てる会

イブキフウロ
(伊吹風露)



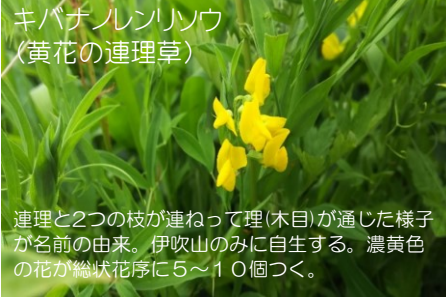
日本固有種で、花卉の露が風を受けて揺れる美しい情景の様子と伊吹特産が名前の由来。花卉の先端が3裂するのが特徴。

精一杯イブキフウロは
空見上げ
私も真似て大空見上げ



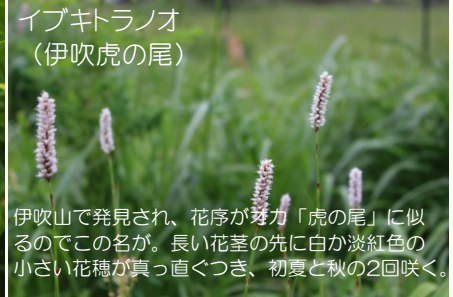
ササユリ
(笹百合)

日本の特産で日本を代表するユリ。上品な芳香があり、花色は美しい淡い桃色。細い葉を例えてこの名に。初花を咲かせるまでに種子から7年の歳月も。



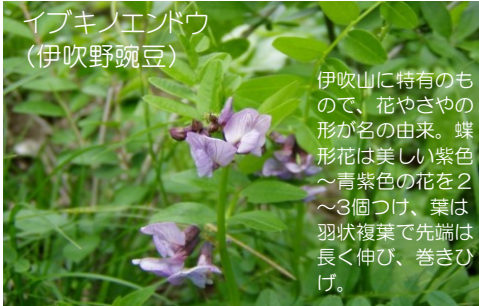
キバチルンソウ
(黄花の連理草)

連理と2つの枝が連ねて理(木目)が通じた様子が名前の由来。伊吹山のみで自生する。濃黄色の花が総状花序に5~10個つく。



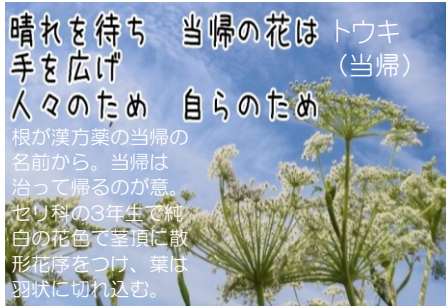
イブキトラノオ
(伊吹虎の尾)

伊吹山で発見され、花序が虎の尾に似るのでこの名が。長い花茎の先に白が淡紅色の小さい花穂が真っ直ぐつき、初夏と秋の2回咲く。



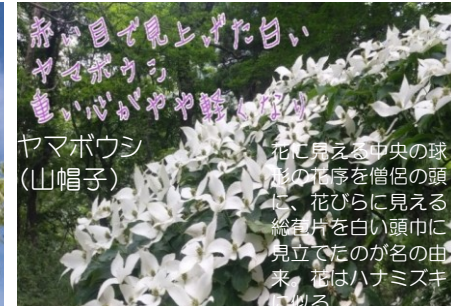
イブキノエンドウ
(伊吹野豌豆)

伊吹山に特有のもので、花やさやの形が名の由来。蝶形花は美しい紫色~青紫色の花を2~3個つけ、葉は羽状複葉で先端は長く伸び、巻きひげ。



晴れを待ち 当帰の花は トウキ
手を広げ (当帰)
人々のため 自らのため

根が漢方薬の当帰の名前から。当帰は治って帰るのが意。セリ科の3年生で純白の花で茎頂に散形花序をつけ、葉は羽状に切れ込む。



ヤマボウシ
(山帽子)

花に見える中央の球形の花序を僧侶の頭に、花ひらに見える総苞片を白い頭巾に見立てたのが名の由来。花はハナミズキに似る。



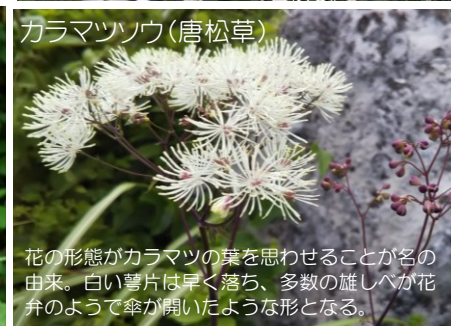
ノアザミ
(野薊)

花が美しいので近寄ると鋭い刺に驚くニガミをか転じてアザミに。花色は赤紫色が多く、総苞が粘るのが特徴。



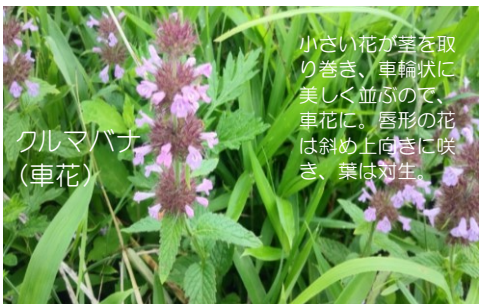
クモキリソウ
(蜘蛛切草)

花の形が蜘蛛に似るのが名の由来。淡緑色の花が総状に5~15個つく。山地の湿ったところに生える。伊吹山の個体数は少ない。



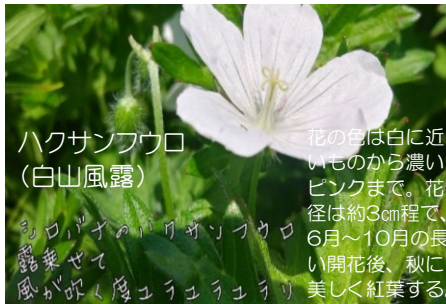
カラマツソウ(唐松草)

花の形態がカラマツの葉を思わせることが名の由来。白い萼片は早く落ち、多数の雄しべが花弁のようで傘が開いたような形となる。



クルマバナ
(車花)

小さい花が茎を取り巻き、車輪状に美しく並ぶので、車花に。唇形の花は斜め上向きに咲き、葉は対生。



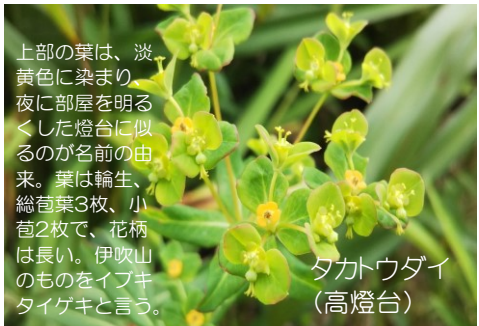
ハクサンフウロ
(白山風露)

花の色は白に近いものから濃いピンクまで。花径は約3cm程で、6月~10月の長い開花後、秋に美しく紅葉する。



ヒメハギ
(姫萩)

小さな紅紫色の花がマメ科の萩に似て、全体に小さいことが名の由来。萼片は5枚あり、花弁と同じように見え、左右の2枚が大きい。



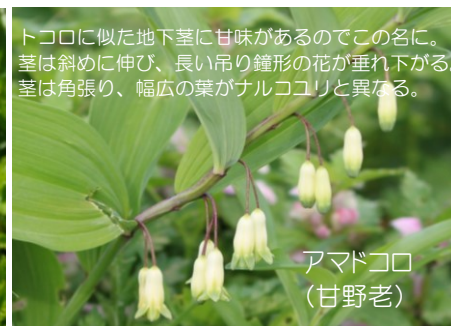
タカトウダイ
(高燈台)

上部の葉は、淡黄色に染まり、夜に部屋を明るくした燈台に似るのが名前の由来。葉は輪生、総苞葉3枚、小苞2枚で、花柄は長い。伊吹山のものをイブキタイゲキと言う。



イブキガラシ
(伊吹芥子)

山に生える芥子の意で、伊吹山に生育するのが名の由来。花色は黄色の4花茎の上部に総状花序につく。獣害による裸地に異常繁殖したが大雨による土砂流出で激減。



アマドコロ
(甘野老)

トコロに似た地下茎に甘味があるのでこの名に。茎は斜めに伸び、長い吊り鐘形の花が垂れ下がる。茎は角張り、幅広の葉がナルココリと異なる。

伊吹山の植生は、麓の海拔300m～600mまでは薪炭林としてのアベマキ・コナラ林、尾根筋のアカマツ林、スギ・ヒノキ・カラマツの植林などが見られ、海拔600m～900mまでは薪炭林としてのミズナラ・コナラ林、谷筋のケヤキ林、伐採後のコクサギ・マユミ・シロモジなどの低木群落、ススキ群落が、海拔900m～1,200mは石灰岩地特有のオオイタヤメイゲツ林が多く、場所によってブナ・ミズナラ林が発達し、海拔1,200m以上は特殊な地質・気象条件から山地草原(お花畑)ができています。(「伊吹山自然観察ガイド」より)
6月頃は、特に1合目から3合目の林道沿いは様々な低木類が花を咲かせます。ゆっくりと花を探してみたいかがでしょうか。

連載 牧野富太郎博士と伊吹山 その3

19歳の牧野富太郎が伊吹山で採集したもののなかにとても珍しい植物がありました。明治17年に再度上京して東京理科大学(東京大学)で、伊吹山で採った「スマレ」の標本を見せたところ、日本で初めて確認された種で「イブキスマレ」の和名がつけられました。ここで、あらためて牧野富太郎(1862～1957)の生涯を紹介します。幕末に土佐国佐川村(高知県佐川町)に生まれました。たびたび上京して東京大学植物学教室に出入りが許され、明治21年(1888)27歳のとき「日本植物志篇」を自費出版。のち大学助手から講師となり、昭和14年(1939)77歳で東大講師を辞任。翌年には、いまでも植物学の研究者や愛好家が必ず携える富太郎の研究の集大成といえる『牧野日本植物図鑑』を刊行します。全国各地の山野を歩いて採集につとめ、94歳の長寿で、収集した標本は約40万枚。富太郎が命名した新種や新品種は1600種に達するといわれます。